

は、「Jリーグを作って何をやるつもりか？」という新聞記者の質問に対して「サッカーをします」と答えた。スポーツをやること自体が目的というスポーツ組織が、

日本に初めて誕生し、プロ野球批判を繰り返していた私に川淵チェアマンが会いたいと言ってきたりで、スポーツライターに戻ったわけです。

坂上 90年代は日本のスポーツ界に変化の兆しが見えた時代で、高校野球部員の丸刈りも減りました。朝日新聞の調査で丸刈りは部の規則だという回答が、98年には30・9%と最低でした。その後再び丸刈りの規則は増加に転じますが、日本のスポーツは、そのような前進と後退の繰り返しですね。

玉木 高校野球の開会式での入場行進は、戦前の帝国陸軍の閲兵式を真似たものですが、その軍隊式の行進がいやで観客席に手を振って歩かせた高校の監督も、その頃に出ました。が、高野連（日本高等学校野球連盟）の役員が飛んできて「キチンと歩け」と怒鳴って直させたそうです。最近では拳を

握って腕を前後に振る自衛隊式の行進が増えています。

坂上 90年代のスポーツ界の変化は、やっぱりバブルの崩壊が大きかったですね。今までのやり方だと日本を立て直せないという危機感で誰もが動き始めた。日本の教育政策も、ゆとり教育に方向転換しました。

玉木 そのゆとり教育から、羽生結弦や大谷翔平のようなアスリートが育ったのですね。

坂上 だから結果は出ているんですよ。スポーツ界だけじゃなく、ゆとり教育から多くのジャンルで新しい才能が育ったはずですよ。

玉木 ゆとり教育以前に興味深い現象が表れたのは丙午（ひつうま）ですね。丙午の年だけ生まれた子どもたちが、その前後と比べて100万人くらい減った。だから丙午の次の年以降には、先輩をどんどん追い抜いていくアスリートが続々と出現しています。桑田真澄、清原和博、野茂英雄、三浦知良、松岡修造たち……ですね。

坂上 日本のスポーツ界の決定的な問題は上下関係なんですね。

能力や個性を伸ばすべきときに、上下関係で籠（かご）に嵌（は）めてしまう。その籠を外す動きが90年代に1度あったのに、それがその後消えてしまった。残念です。

玉木 バスケトボールでは日本代表クラスの選手が先輩の望む会社への就職を断ったため、卒業に必要な単位数を減らされ、卒業が1年遅れたなんて復讐（ふしう）をされたこともあったそうです。先輩後輩の上下関係は、就職という利害関係でつながっているようです。

坂上 大学で最もダメなのはスポーツ推薦入学ですね。90年代以降、多くの大学が学生集めや宣伝目的で、スポーツ推薦入試を導入し、今や3割を超える大学で実施されています。この是非についての議論はほとんどないですね。大学教員も身内なので批判しない。推薦入試には確かに個性重視という面もありますが、勉強せず部活だけやっていたら大学に入学できて卒業もできるというのは、学生に対して罪深い制度だと思えます。スポーツで一流のプロになれるのは、ほんの一握りに過ぎない

からです。大学に入学できて、親も安心するでしょうが、怪我をすれば終わりだし、社会人になってから困るのは本人です。おまけに大学や高校のスポーツ推薦の判定基準は、中学高校時代の公式戦での成績です。そのため指導者は、試合の成績を上げるために必死になる。

玉木 勝利至上主義が蔓延し、そのせいで体罰がなくならない要因ともなっているんですよ。

坂上 そうです。推薦入試の初っ端は、国の選抜方法の多様化政策で、様々な入試の方法を取り入れなさいということで、一芸で合格者を決める大学も出たり……。

玉木 それ、覚えてます。剣玉が上手いことで入学できた学生が出たりして、マスコミも大きな話題にしました。

坂上 狙いとしては面白い面もあったのですが、スポーツの「一芸入試」の場合は、その内容とか質ではなく、試合成績という結果重視になってしまった。

玉木 スポーツライターの小林信也さんが、中学生の硬式野球の監